

# 02 北海道石狩市 地域資源を生かした観光振興と住民の自治意識醸成

What ▶ #観光 #移住・関係人口 #集落再生 #シビックプライド



左から石狩市 浜益支所 地域振興課の柿崎 恵一さん、浜益観光まちづくり推進協議会 会長の渡辺 真奈美さん、石狩市 浜益支所 地域振興課の小貫 陽子さん。「浜益富士」として親しまれている黄金山をバックに。

### お話を伺った方々

#### 地域再生マネージャー

有限会社 アグリテック  
代表取締役  
なかだ ひろやす  
中田 浩康さん

#### 行政

石狩市 浜益支所 地域振興課  
柿崎 恵一さん  
小貫 陽子さん

#### 民間

浜益観光まちづくり推進協議会 会長  
渡辺 真奈美さん

## 「観光振興」から「住民自治」によるまちづくりへ

増毛山道の復活を機に高まりはじめた石狩市浜益区のまちづくりの機運。それを受けて始まった観光施策は、ツアーの実現や商品開発など一定の成果を挙げた。しかしそれ以上に大きな実りとなったのは、地域住民の自治意識の芽生えだったという。事業を経た後、浜益のまちづくりはどのように変化しているのだろうか。

### 課題

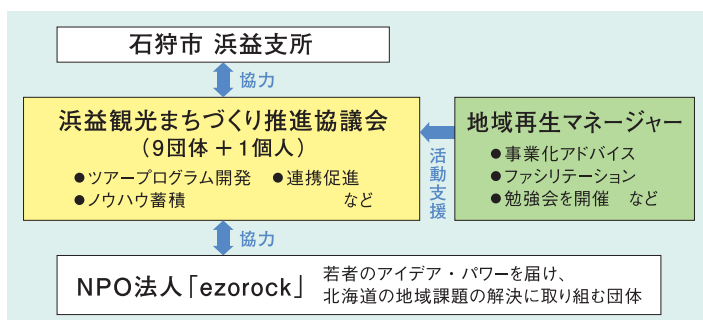
旧浜益村は、2005 年度に石狩市に編入。石狩市街地から距離があるだけでなく、周辺の車道の開発が大きく遅れ、1960 年代までは隣町にすら車で行くことができない「陸の孤島」と呼ばれていた。近年はシーズンになると海水浴客が多く訪れるものの、地域の魅力を打ち出す取り組みは進んでおらず、高齢化・少子化による人口減少に頭を悩ませてきた。そのような状況の中、少しずつ地域に目を向けた活動を行う団体が現れ、2016 年 10 月に増毛山道が復活したことを契機に、自然資源を生かした観光振興に対する機運が一気に高まった。しかし、各団体の連携が行われておらず、観光施策をどのように進めていくべきかが課題となっていた。

### 目的

独自に活動する団体と浜益支所、地域住民が連携して観光振興に取り組むための組織づくりを行う。その上で、自然資源を生かした観光コンテンツの開発、情報発信などに取り組み、関係人口創出と地域経済の活性化を目指す。また、取り組みに地域住民を巻き込んでいくことで、まちづくり意識の醸成にも繋げていく。

## 地域再生マネージャー事業 実施期間 (2018年度～2019年度)

### 事業実施体制



地域で活動する団体や第 1 次産業従事者、観光関連事業者が参画する「浜益観光まちづくり推進協議会」(以下、まち協)が中心となって事業を推進。浜益支所はプロジェクトの進行管理や各団体・地域住民への声掛けなどを行うと同時に、必要に応じて各部署がまち協と連携して動いた。また、地域再生マネージャーとして、同じ道内の東川町で活動する中田 浩康さんを招聘し、意見集約の際のファシリテーション、商品開発のアドバイスなど多方面からサポートを受けた。

### ●地域を主体とした組織づくり

#### What — 何をしたのか？

観光プログラムの開発や受け入れ体制を構築するためには、地域で活動する団体や関連事業者が密に連携しながら取り組む必要があった。また、地域住民の間には「行政依存」の傾向があったため、持続可能な運営体制構築に向けて、民間から起こった動きを拾い上げて必要な事業者を巻き込みながら、地域主体で取り組みを進めるための組織をつくり上げることを目指した。

#### How — どのようにしたのか？

##### ●「浜益観光まちづくり推進協議会」を設立

浜益区には増毛山道復活に取り組む団体だけでなく、<sup>こがねやま</sup>黄金山の環境保存に取り組む「こがね山岳会」、貴重な自然資源である巨木<sup>せんぼん</sup>「千本ナラ」などの保全を行う「浜益『千本ナラ』巨樹・巨木保全協議会」など自然や景観保護に取り組む団体が複数ある。その他、歴史研究会や地域の歴史・文化に精通する地域住民、バスツアー会社などの観光関連事業者、農家や漁師などにも参加を呼びかけた。また、若い世代の参画を促すため、地域で活動する若手の団体「浜益わかもん会」にも声を掛け、最終的に9つの団体と個人1人でスタートした。

「当初はアウトドア関連の方を中心に集めたのですが、もっと幅広い属性のメンバーが必要だと感じ、とにかく『この人は面白いな』と思う人にはどんどん声を掛けました」（柿崎さん）

「浜益わかもん会は、あまり交流のなかった地域の若者同士で何か一緒にやってみよう、という目的のもとで2017年度に設立した団体です。当時私が代表を務めていたのですが、柿崎さんがある日突然、資料を持っていらっしゃって、『観光でまちづくりを進めるための講座に参加してくれないか』と誘われたんです。もともと祖母が経営する民宿で手伝いをしていたこともあり、私も観光に対して興味はありました。そこで、とりあえず講座に出て話を聞いてみることにしました」（渡辺さん）

### ●観光プログラム開発と情報発信ツールの制作

#### What — 何をしたのか？

観光コンテンツをつくり上げていく前に、まずは地域資源を改めて整理するところからスタート。その後、開発や運営に必要なノウハウを得るための勉強会や視察を重ね、情報発信や地域ガイド育成など運営に必要なスキルを身に付けていった。

#### How — どのようにしたのか？

##### ●勉強会と先行事例の視察を実施

まち協スタート後の最初の活動として、現在の観光業の考え方を学ぶ勉強会を開催。その後、観光による地域づくりに取り組む地域や、地域再生マネージャーのフィールドである東川町などを視察した。

「最初の勉強会では、今は大型バスを使って乗りつける観光ではなく、現地が主導するスタイルが主流であることを学び、そこから浜益区内にある団体がどのような観光資源を持ち、どのような活動を行っているのかを整理しました。視察にもたくさん行きましたが、地元の人が主体的に動き、手づくりのおもてなしを行っている事例を見て、これが浜益が目指す姿ではないかと感じました」（柿崎さん）

「中田さんのお話の中で『普段の暮らしが観光になる』という言葉がとても胸に響きました。お金をたくさんかけるのではなく、今ある資源を使って活動する。例として挙げられていた活動も、『カンジキを履いて雪道を歩くだけでも観光になる』といった私たちでもすぐに手が届きそうな内容で、とても新鮮でした」（渡辺さん）

また、情報発信を行うためのウェブサイト制作や撮影テクニックを学ぶ講座、ガイド人材育成のための講座など、基礎スキル向上のための講座を開催した。

##### ●地域資源を生かした観光プログラム・商品開発

勉強会や先行事例の視察を経て、実際に浜益地区でどのようなプログラムが実現できるのかを検討。地域資源や団体の活動を整理し、いかにして観光と結び付けられるかのアイデア出しを行った後、実現可能なものから形にした。開催後は参加者アンケートをもとにターゲットやニーズを把握。適宜ブラッシュアップを実施していった。

「中田さんにはアイデアの取りまとめから事業化のアドバイスまで幅広く関わっていただきました。中でも、道内で活躍されているさまざまな専門家と繋げていただいたり、『いかに稼ぐ仕組みにするか』という視点の大切さを教えていただいたことは大きかったですね。

『地元の人が善意で行ってきた地域の案内をガイド料をもらって行う』という当たり前のことすら、これまで意識できていなかったわけですから。しかしながら、中田さんが浜益に来るのは年に3、4回程度なので、その間は自分たちで動かなくてはならない。毎回出される宿題を形にしていくのは大変ではありましたが、地域が主体的に動ききっかけにもなったと思います」（柿崎さん）  
また、参加していた地域おこし協力隊員が、地域のブランド力を高めてシビックプライドを醸成するためにオリジナルロゴをあしらったTシャツを製作。浜益支所の担当者やスタッフも着用し、一体感を高めた。

### ●ウェブでの情報発信を強化

2018年度に区内の観光情報を集約したポータルサイトを制作。地域再生マネージャーのアドバイスを受けてSNSの閲覧数分析も行い、閲覧者の興味・関心を数字で把握することで情報発信の精度を高めた。2019年度には商品販売を行うオンラインショップも開設した。

## 主な成果

### ●各種ツアー・体験プログラムを実施

2018年度は史跡「<sup>しょうないはん</sup>荘内藩ハママシケ陣屋跡」のモニターウォークや<sup>じんやあと</sup>田園地帯を巡るフットパスウォークなどを実施。2019年度には「まち探検」や「農業体験」などのプログラムとバスツアーを形にした。中でも大きな手応えを得たのは「イチイの木スノーシューツアー」だったという。

「スノーシューを履いて、イチイの巨木まで片道3.3kmを歩くバスツアーなのですが、その発着地になっている農家さんが暖房を効かせた倉庫で手作りの甘酒などを用意して待っていてくれるんです。収益化は実現できていませんが、とても温かくホスピタリティにあふれたおもてなしをされていて、参加者の満足度がとても高い。毎年楽しみに来てくれるリピーターさんもいます」（小貫さん）

### ●NPO法人「ezorock」との協力関係が深まる

2017年度に、石狩市で開催されている「ライジングサン・ロックフェスティバル」でゴミの分別などのボランティア活動を行っているNPO法人「ezorock」メンバーのひとりが浜益区の巨木の樹木診断を行ったことがきっかけで、同団体との交流が生まれていた。2018年度から共に「イチイの木スノーシューツアー」開催に向けて協力し、2019年度にツアーが実現。「ezorock」メンバーはボランティアで運営に参加している。

### ●地域住民のまちづくりに対する姿勢が変化した

「身近なものが観光資源になるという気付き」と「プログラムを自分たちの力で形にした成功体験」が地域住民の意識を変え、これまで地域づくりを意識したことがなかった地域住民からも「こういうことをやってみたい」「間違ってもいいからとりあえずやってみよう」という声が上がった。それらは大きな事業には至らずとも、地域住民同士の話し合いの機会を増やし、交流を促す役割も果たしている。

「ツアーの収益化はもっとも苦労した点で、事業をもう1年継続するには地域の力がまだまだ足りていませんでした。そのため3年目は申請を断念しましたが、誰かが声を上げたらそれに呼応する人が現れるようになり、『できること』や『やれること』が増えた。それが最大の成果であり、事業をやって良かったと心から思っています」（柿崎さん）

## 地域再生マネージャーコメント



有限会社 アグリテック 代表取締役 中田 浩康さん

### 自分たちで取り組みを継続するために 地域の人同士の顔が見える関係を

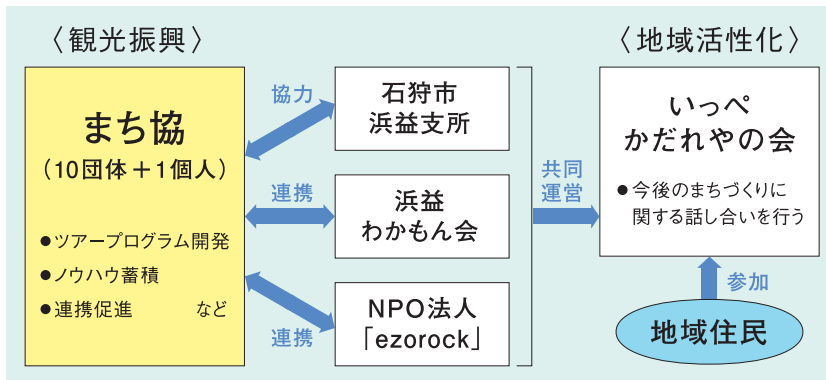
私のフィールドは北海道の東川町というところなのですが、実は事業に関わるまで浜益区のことはいささか詳しく知りませんでした。しかし実際に行ってみると、黄金山があり、荘内藩ハママシケ陣屋跡のような歴史的価値の高いものもあり、果樹があり、もともとはニシン漁で栄えていて、コンパクトなまちにたくさんの魅力が詰まっている場所だと感じました。事業としては観光で人を呼びたいということだったので、まずは運営組織の構築、各団体の活動周知、観光プログラムの作成を3つの柱として取り組みました。特に意識した点としては、収益化を念頭に置くことです。同時に、「そんなことで人が来るのか？」と疑問を抱く地域の人たちの意識を変えるため、勉強会や講習会にも力を入れました。幸い、行政の規模が小さいこともあって役場と地域の距離が近く、職員の方々にフットワーク軽く対応していただけたことは、成果に繋がったポイントだと思います。地域再生マネージャーはカンフル剤として地域に入るわけですが、ずっといられるわけではない。抜けた後も地域が自分たちで取り組みを継続していく必要があります。そのために「まち協」を設立し、地域の人同士の顔が見える関係性を構築しました。本事業が基盤となり次の取り組みに発展していつているので、さらなる展開を地域の方々に期待したいです。

#### PROFILE

栃木県小山市出身。東京農業大学卒業後、農文協で全国の農山漁村取材し地域資源の多様性に魅了される。退職後は北海道で農村ライターとして活動し、2003年より観光まちづくり事業に参画。地域資源を活かした体験観光や交流人口増加に取り組む。

## 地域再生マネージャー事業 終了後の取り組み (2020年度以降)

### 事業実施体制



観光振興の取り組みは「まち協」が中心となって継続。浜益支所は情報共有や事業・補助金申請などの面でサポートを行っている。また、事業を経て地域住民の間に自治意識が芽生えたことにより、取り組みの幅が拡大。観光を超えたまちづくりを行うための新たな対話の場「いっぺかだれやの会」を開催。浜益支所・浜益わかもん会・NPO法人「ezorock」が共同で実施している。

### 事業実施内容

#### ●観光振興の取り組みから、地域主体のまちづくりへ

#### What — 何をしたのか？

事業実施期間中に観光ツアーを複数実施したことにより、今後の取り組みを行うにあたり「何が足りないか」「人手不足をどう解消するか」などの課題が見えた。それを踏まえ、まちの現状に合わせて変化しながら、観光だけにとどまらないまちづくりを始めている。

#### How — どのようにしたのか？

##### ●ツアーやプログラムの見直し

事業実施期間中に開始したツアーやプログラムは、地域がそのとき抱える課題や状況と照らし合わせ、随時見直しや継続可否の判断を行っている。たとえば「イチイの木スノーシューツアー」はリピーターを生んで毎年開催を継続しているが、「フットパス」は交通インフラの課題を解決することができずいったん断念した。

「正直なところ、どのツアーも参加者数自体は増加しているわけではなく、催行ギリギリになってしまうこともあります。しかし、リピーターが半分以上を占め、中には毎年楽しみに来てくれる方もいる。そういう繋がりを大事にしていきたいと考えています」(小貫さん)

##### ●地元の小・中学校と連携

浜益中学校の生徒が修学旅行先で地場産品を販売する活動を行っており、まち協ではその活動を支援するため、2020年度から合同でマルシェを開催。次の活動資金として使えるよう、収益はすべて中学校側に渡しているほか、PR活動で使用するのぼりや動画、ノベルティグッズなども製作した。取り組みを行うにあたっては「いきいきふるさと推進事業助成金」を活用した。その他、小・中学校が独自で千本ナラ周辺での植樹活動を行ったり、りんご園で1年間りんごを育てる体験や、「宿泊研修」で他地域と浜益を比較してみる学習を実施するなど、地域学習に力を入れて取り組んでいる。

「マルシェを行うことで地域の魅力や特産品を知るきっかけにもなりますし、自分たちで稼ぐ経験を積むことができる貴重な機会となっています。浜益区には高校がないので、みんな一度は外に出ていってしまうのですが、ふるさとを大事に思う気持ちをもってもらいたいという思いで、若い世代の地域学習に力を入れています」(柿崎さん)

##### ●「ezorock」との連携を深めた

「ezorock」の活動拠点を浜益区内に設置したことで、メンバーが区内での活動を行いやすくなり、関わりがさらに深まった。メンバー内から地域おこし協力隊として浜益区に移住する人も現れ、観光の枠を超えた地域活性化の取り組みを始めている。

## 主な成果

### ●観光振興を契機とした「住民の自治意識」の高まり

観光ツアーやプログラムなどの継続実施により、住民が地域のことを考える機会が増え、地域のことを自分ごととして意識するようになった。また、浜益区は2026年3月に地域自治区の設置期限を迎えることもあり、まちづくりの転換期にある。「頑張りのペースは同じですが、やりたいことが変わってきている。まち協で言えば、これまでは集客メインの観光事業が中心でしたが、最近では地域の実情に合わせて、『地域の人にも外から来る人にも喜ばれるものは何か』を、これまで培ったネットワークや、関わっている人たちも踏まえて考えるようになってきました。その上で今、目指しているのは、地域運営組織の構築ですね。ひとつは地域住民の課題や困りごとを解決・解消する組織。もうひとつは地域住民からの『行政ではできないけれど、有料でいいから何かしてほしい』という要望に応じて事業を運営できる組織。今はそのスタートラインに立っていて、まずは対話から始めています」(柿崎さん)

「今、浜益支所では観光を含めて『まちづくり全体をどうしていくか』という話し合いを進めているところなんです。しかし人口減少や高齢化が甚だしく、浜益支所だけの力ではどうにもならない部分もある。地域に暮らす人が『どういう地域に住みたいか』『何が必要なのか』と地域のことを自分ごととして考えていくような話し合いをしながら、一緒にまちづくりを進めてほしい。そう考えて浜益わかもん会に話を振ったところ、『一緒にやっていきませんか』と仰ってください、『いっぺかだれやの会』を開催することになりました。ファシリテーションを札幌のNPO法人の方をお願いし、『ezorock』『浜益わかもん会』と浜益支所で運営を実施。地域の方にも参加していただいています。初年度となる2024年度は『いっぺかだれや憲章』を作り、話し合いの上で何を大事にしていきたいかを示しました。2025年度はもう一歩踏み込んで、具体的に目指すまちづくりの姿を固めていきたいと考えています」(小貫さん)

### ●「ezorock」との関わりがさらに深化

浜益支所が区内の旧職員住宅を活動拠点として提供したことで、地域住民との繋がりも増え、現在も関係人口創出の取り組みを共に進めている。

メンバーが「イチイの木スノーシューツアー」だけでなく、果樹園との協力で生まれた「秋の味覚ツアー」でも運営にボランティアとして参加。担い手不足の解決に寄与しているほか、都市部との接点をつくる窓口としても機能。札幌市の大学生を浜益区と繋ぎ、地域外との交流の幅が広がっている。また、メンバーから3人が地域おこし協力隊として浜益区に移住し、観光事業の担い手として活躍しながら、自身でも何か地域のためにできることはないかを考え、少しずつ動きはじめているとのこと。

「『ezorock』を通じて訪れる若者たちは、浜益に興味を持ってやってくるため、主体的に動いてくれます。彼らのやりたいことをやりたいようにやってもらうことが地域のためになるので、必ずしも地域と関わってくれる人＝観光でなくてもいいのではないかな。最近はそんな風に流れが変わってきたのを感じています」(柿崎さん)

**いつもみんなが集まって**  
料理も酒もOK。  
いつでもだれでも歓迎する。

**つながりを大切に**  
否定せず、受入れ、つながる。  
聞き上手になる。

**ぺちゃくちゃおしゃべりしながら**  
年齢や職業に関係なく、  
だれでも話しやすくを大切に。

**かだいはたくさんあるけれど**  
企画、悩み、アイデア、いろいろ。  
持ち寄り、話し、形にする。

**だれもが嬉しく暮らせるように**  
「私たち」で始める。  
「私たち」から始める。  
友の人も一緒に。

**れんけい連帯協力して**  
ずっと残ってきた浜益の  
「たすけあい」の力を再石結忍。  
「共担力」を続けていく。

**やっぴいこうぜ浜益**  
それぞれのペースでできることから。  
浜益LOVE!

話し合いの上で大切にしていきたいことを掲げた「いっぺかだれや憲章」。地域内外の人が連携し、これからの浜益の姿を考えていく。

## 自治体コメント

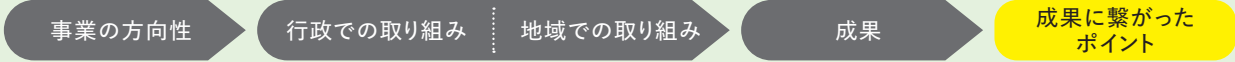


石狩市 浜益支所 地域振興課 小貫 陽子さん

### 事業で得られたものを生かし、地域住民が笑顔になれるまちづくりを

当初はまちに人を呼ぶための「観光まちづくり」を進めるため、事業を申請しました。事業を終えて、収益化という点では達成できていない部分も多くはありますが、何よりも地域の方々が「自分たちでやってみよう」という意識を持ちはじめたことが大きな成果であり、その後のまちづくりを進める上での基礎になっていると思います。新たに発足した「いっぺかだれやの会」には、地域内からも地域外からも人が参加し、浜益の未来について話し合っているところです。今後は、観光の取り組みで得られたものを生かし、地域住民が笑顔になれるまちづくりに発展させていければと考えています。

# 取り組みのプロセス



マネージャー事業実施期間中

## 1年目(2018年度)

地域で独自に活動している団体同士が連携し、継続して事業を推進していくための組織づくりを行った。また、視察や勉強会などを通じて、観光プログラム作成・運営に必要な知識とノウハウを身に付けた。

地域振興課が事務局として事業を統括。事業を行う上で必要な手続きは担当する各部署と連携して行った。また、運営組織構築にあたっては、地域の団体や人材のもとに交渉し、地域住民の理解を深めると同時にプログラムづくりのアイデアを広げた。

「まち協」設立によって団体や個人が「観光振興」に向けて連携。勉強会やワークショップを通じてノウハウや考え方を学び、自走していくための基礎スキルを身に付けた。また、各団体がどのような活動を行っているのかを棚卸し、地域住民の理解を深めると同時にプログラムづくりのアイデアを広げた。

- 「まち協」設立により、地域間の連携が進んだ。
- 「荘内藩ハママシケ陣屋跡」モニターウォークやフットパスウォークなどの体験ツアーを実施した。

- 当初より運営団体設立を目標として動き、浜益支所の職員が自ら熱心に声掛けを行った。
- 地域住民のまちづくりに対する意識を高めるため、勉強会やワークショップを何度も開催し、地域がもつ魅力をどのように観光に変えていくのか、理解を得られるまで説明した。

## 2年目(2019年度)

前年に発足した「まち協」が中心となり、観光プログラム作成やモニターツアー、人材育成などを実施。実際の運営を通じて内容を見直していった。

引き続き、地域振興課が事務局として事業を統括。事業を行う上で必要な手続きは担当する各部署と連携して行った。

「まち協」を中心に取り組みを推進。観光プログラムづくりを継続しながら、複数のツアーを実施。地域外のNPO法人「ezorock」との関わりを深め、担い手不足に対応した。

- 「イチイの木スノーシューツアー」を開催。参加者の満足度が高く、毎年参加するリピーターを生んでいる。
- 地域住民に「とりあえずやってみよう」とする意識が芽生え、地域主体の動きが加速した。

- 「ezorock」のメンバーが観光事業の担い手として関わりを増やした。
- 地域で芽吹いたまちづくり意識を、事業を通じて丁寧な育て、住民間で顔が見える関係性を構築した。

マネージャー事業終了後

## 3年目(2020年度)

事業実施期間中に見えた担い手不足や収益化などの課題に対し、地域の現状と照らし合わせながら持続可能な観光プログラムづくりを行った。また、「ezorock」との関わりを深め、地域外から若者を呼び込んだ。

引き続き、地域振興課が事務局を担い、取り組みに必要な事業申請や情報共有などを継続して実施した。また、旧職員住宅の空き部屋を「ezorock」メンバーが区内で活動するための拠点とした。

「まち協」が中心となり、地域主体で事業を推進。「イチイの木スノーシューツアー」などの体験プログラムを、トライ&エラーを重ねてブラッシュアップした。また「ezorock」メンバーがツアー運営などにボランティアで参加した。

- 浜益中学校の生徒と協力し、マルシェを開催。収益はすべて、中学生が地域をPRするための活動費として使われている。
- 「ezorock」メンバーが地域おこし協力隊として浜益区に移住した。

- 「まち協」と地域間の連携が深まり、地域の小さな動きを拾い上げられるようになった。
- 「ezorock」に浜益区内での活動拠点を提供し、関わりを深めた。

## 4年目(2021年度)以降

「まち協」が観光施策を継続しながら、新たに生まれてくる地域住民主体のまちづくり活動を促進。今後は「いっぺかだれやの会」のような「対話」をまちづくりの中心に据えて、幅広い視点で「地域活性化」に取り組んでいく。

地域住民の主体的な活動を拾い上げ、事業化に向けた支援を行っている。中には団体に所属して活動する職員もおり、「いっぺかだれやの会」開催にあたっては官民共同で運営を行うこととなった。

「浜益地区の活性化」に重点を置き、観光にとらわれず、地域のことを自分ごととして考え、取り組みを継続している。

- 浜益のまちづくりの未来を考える「いっぺかだれやの会」を開催。「浜益わかもん会」、「ezorock」、浜益支所の3者が共同で運営し、地域内外から参加者を集めている。
- 観光事業の収益化や担い手不足は引き続き課題ではあるものの、地域住民が主体的に動く風土が醸成された。

- 「ezorock」を通じて地域外との交流機会が増え、浜益に興味を持つ若者が地域を訪れている。
- 「浜益地区の活性化」を目的とし、観光という手段にとらわれず、広い視野で個々が「できること」を考えて実行している。

## 2024年度までの実績

体験ツアーの実績については次の通り。①「フットパスウォーク」を2022年度に3回実施し、合計21人が参加。翌年度以降は内容見直しのため開催せず。②「秋の味覚ツアー」は毎年1回開催しており、2022年度は20人、2023年度は25人、2024年度は18人が参加。③「イチイの木スノーシューツアー」も毎年1回開催し、2022年度は18人、2023年度は18人、2024年度は17人(インバウンド客1人含む)が参加した。いずれも札幌市や旧石狩地区からの参加が中心だが、市外や道外からのリピーターもいる。また、「いっぺかだれやの会」には一般の地域住民、地域活動団体、自治会、大学生、浜益支所職員など140人が参加。年代は20から80代、居住地域は浜益区をはじめ旧石狩市、隣接する厚田区、札幌市など、幅広い属性のメンバーが集まった。